



三春中学校だより

第 22 号

発行日 平成30年 8 月 7 日

発行所 三春町立三春中学校

電 話 0247-62-2181 F A X 0247-62-6978

E-mail miharu-j@fcs.ed.jp

【教育目標】『三春に暮らす生徒一人ひとりに、将来に対して喜びと生きがいのある人生を主体的に創造する力を育み、地域に信頼され、ひいては、国際社会に貢献できる人材を育てる』

【PTA奉仕作業においでいただきありがとうございました！～きれいになりました。～】

8月5日(日)の早朝7:00より実施されたPTA奉仕作業に際しましては、お休みのところ、早い時間からたくさんみなさまにおいでいただきありがとうございました。

学校でも、清掃をがんばったり作業員さんにご努力いただいたりして、きれいな学びの環境づくりには取り組んでいるところですが、窓ふきや植栽の草むしりまでは、なかなか手が回らない現状でした。

この日は、CGでの開会式の後、各学年に分かれて窓ふき等に取り組んでいただき、区切りがいったところで、1階から外に移動、外側の窓ふきや草むしり等に取り組んでいただきました。PTAのみなさまと一緒に作業しているとだんだんと汗が流れ、そんな中で子どもたちのために奉仕作業に取り組んでくださっている保護者のみなさまに心からの感謝の気持ちが湧いてきました。この日、共に奉仕作業に携わってくださっている保護者のみなさまの思いを大切に、感謝し、そのお一人おひとりの子どもたちを大切に育てていこうと強く思いました。



【子と親が共に育つPTA活動を！～未来を担う子どもたちのために田村P連研究大会開催～】

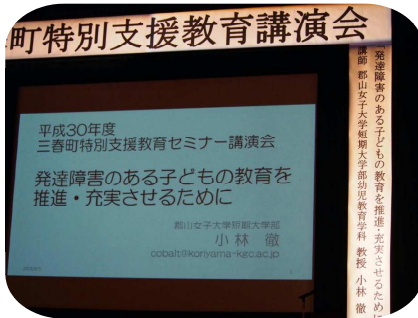
8月5日(日)に、田村市文化センターを会場に、大会統一テーマ「子と親が共に育つPTA活動を～未来を担う子どもたちのために～」のもと、平成30年度の田村地方PTA連合会研究大会が開催され、PTA会長・副会長様をはじめ、本校よりも6名のPTA会員が参加しました。

開会式では、これまでPTA活動にご尽力いただいたみなさまに感謝状が贈呈され、その後、全体会、講演会と会は進みました。全体会では、①広報・教養、②施設・設備、③厚生・補導・家庭教育・進路の3領域について、それぞれ、船引小父母と教師の会、都路小PTA、中妻小PTAの3団体より実践報告をいただきました。それぞれの地域の特色を生かしたPTA活動に、どのPTAも、地域のよさを生かし、子どもたちのために一生懸命活動してくださっているんだなあという感想をもちました。

講演会は、茨城県メディア教育指導員連絡会長の堤千賀子先生を講師に、「子どもとインターネットを考える～最終責任者は保護者です～」と題した講演でした。終了予定時間を30分以上も上回る熱心な講演に、現代の保護者、子どもたち、学校の抱える問題の深さを痛感いたしました。親が買い与えた情報端末、「わからない。」では親の責任が果たせない。買い与える以上、その現実や事件・事故に巻き込まれないための手立てについて買い与えた親自体が勉強しなくてはならない。最低限、法律で決まっている18歳以下のフィルタリングは必ずかけてあげたいというお話でした。



『命の輝き』 = 自分もまんざら捨てたものではない！～町特別支援教育セミナー講演会～



(前号よりの続き)

『発達障がいのある子どもの教育を推進・充実させるために』

講師 郡山女子大学短期大学部教授 小林 徹 先生

2 福島に来て体験したこと I

幼稚園の先生からの相談で、園児に紙芝居を見せるので、「お椅子をもってホールに集まろう。」と指示したところ、その子だけがホールに体育座りをして待っていたので、椅子を持ってくるようにその子に向かって指示すると、はじめてまわりの様子に気づき、椅子をとりにいった。また、工作の時、「はさみとクレヨンを持ってきて。」と全体に指示すると、その子ははさみだけ持ってきた。おやごさんにそれを伝えてもあまり心配していなかった。理解力が乏しいのではないのでしょうか、保護者にはもっと危機感をもってもらわなくてはならないのではないのでしょうかという質問があった。

その先生はその子の特質を理解していなかった。複数の指示を全体に向かって発することでは伝わらないが、その子に向かって一つずつ具体的に指示することで理解することができるということ。個に応じて適切な指示や働きかけをしていくことで、その子のもっている能力を引き出すことができるということを指導者として学んでいくことが大切である。

また、こんな場面もあった。幼稚園に通う5歳男児、入園当初から他の子をたたく癖があり、その癖を直すため、園中に、“人を叩かない”という表示を貼った。その結果、叩くことはなくなったが、かわりに、人をさわりまくるようになってしまった。園として次の指導をどうすればいいのか分からない。

私は、叩くから触るという変化を望ましいものと評価して男児に伝えると共に、その上で、5歳男児に、「触ってもいいですか。」と相手に聞けるようにすることを学んでいってもらうことを指導してはどうかとアドバイスした。どの子どもにもある、“よくあろう”という思いを信じ、視点をかえて、わずかな変化でもその努力を評価し、相手に聞くという行為を通して、集団の中の一員、自分以外の個という意識をもたせる指導で、将来的にも、子ども同士、人との関係が今以上にスムーズになっていくものと考えらる。

3 福島に来て体験したこと II

(1) 自立活動について

自立活動とは、障がいの改善・克服を目的として行われる授業であり、障がいそのものに働きかける教育活動である。多くの場合、できないことへのピンポイントの指導に陥り、できないことをできるようにさせたいと思う学習が、子どもの学ぼうとする意欲の低下につながりやすくなる傾向がある。

幼稚園の成り立て先生。牛乳を全く飲まなかった園児が、この先生が担任となってからちゃんと牛乳を飲むようになった。しかし、ある時から再び全く牛乳を飲まなくなってしまった。成り立て先生は私に相談にきて、「一時は飲んでくれたのに、どうしてまた飲まなくなってしまったのか分からないんです。」と訴えた。話を聞くうちに、この先生は牛乳を飲まない園児から見限られたのだなと考えるようになった。成り立て先生の訴えの背後には、自分は成り立てだが牛乳をちゃんと飲ませることができて、同僚から一時高い評価を受けた。それがまた飲まなくなってしまった。自分の評価が低くなってしまおうという思いがあるのではないか。この成り立て先生は、自分の力でこの園児に牛乳を飲ませることができたと勘違いしている。そうではなく、この園児は、新たに自分の担任になったこの成り立て先生の言うことを聞けば牛乳がおいしく飲めるようになるのではないかと期待して飲み始めた。がんばって飲んでいたので一向に牛乳がおいしくない。自分ががんばって飲んでいることをこの成り立て先生は一向に認めてくれない。飲んでやっているのに、その気持ち・がんばりを考えずに自分が飲ませたと勘違いしている。この先生の言うことを聞くのは止めた。

また、悪さばかりする園児がいた。やってだめと言われるとわざとしてしまう。言われれば言われるほど、相手の嫌がることをしてしまう。

自立活動の学習は、できないことをゴリゴリやらせる忍耐の繰り返しの授業ではなく、いろいろなことを楽しく前向きに学ぼううちに気づいたら分かるようになっていた、できるようになっていたという授業にしていきたい。そして、嫌がることをわざとしてしまう子には、その子をぎゅっと抱きしめて、「あなたは悪くないよ。」と言ってあげられる人の存在がほしい。

(その2 紙面の都合で、内容等は次号以降複数回に分けてご紹介いたします。)